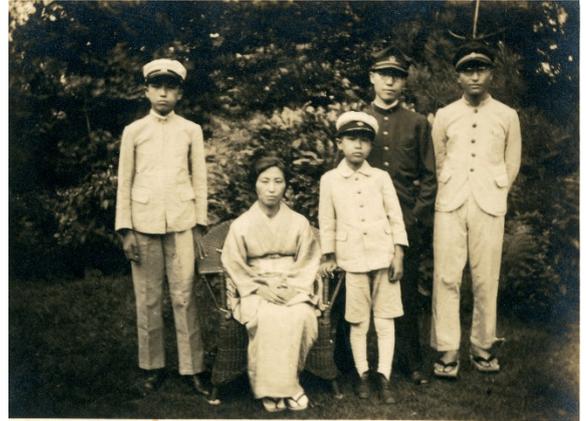


(3) 母・丸山セイ (1884～1945)

丸山セイは1884(明治17)年に大庭直也・大庭カヨの三女として山口県阿武郡萩町で生まれた(丸山セイと子どもたち〈丸山彰氏提供〉)。異父兄は井上亀六。従弟に日本画家の佐野 曠<sup>ひろし</sup>(五風、1886～1974)がいる。丸山は学生時代から京都の下鴨にあった佐野の家を訪ねることがあった。



セイは文学少女で、「少女時代から短歌雑誌のレギュラーの投稿者」だった。丸山が詩歌に親しんだのはセイの影響である。結婚後は歌作から離れていたが、最晩年の病床で8首の和歌を遺した。当時入営中の丸山については、「召されゆきし 吾子<sup>ごこ</sup>をしのびて思ひ出に 泣くはうとまし不忠の母ぞ」と詠んでいる。この歌について丸山は次のように述べる。

最後の病床にあって、天皇陛下のお召を受けて戦争に行くのは名誉なことと思わねばならぬという、そういう明治に育った母の規範意識というものと、にもかかわらず出征の日の朝の別れを思い出しては泣く自分——自分是不忠の母だ、これではいけない、という気持と、やはり自分是不忠でもこの切ない気持を押さえようがないという、その二つの感情のあいだに引き裂かれたまま死んでいった母を思いますと……ほんとうに痛ましくなります。これは明治の時代に育って、わが子を戦地におくった数多くの母に共通した感情であったと思います。(丸山眞男「二十世紀最大のパラドックス」)

丸山幹治の項で触れたように、丸山の小学生時代の終わりごろから幹治は単身赴任に出たため、それ以後はもっぱらセイが4人の子を育てた。経済的にも余裕はなく、セイの苦勞は並大抵のものではなかったという。子どもたちに対してセイは教育ママのような存在であり、「侍の娘で厳し」かった。放任主義的な幹治と、厳しく躰けようとするセイは「対照的」だったが、そのことがかえって子どもにとってはよかったともいえると丸山は回想する。

子どもの教育方針にあらわれた両親の「対照」性は、両者の人生観・世界観の違いに根差すものであった。

親父なんかは、天子さん、天子さんといっていました。思想問題については、当時としては実にリベラルだったと思います。根っからのジャーナリストで、哲学とか「理屈」はきらいですが、むしろその意味で明治の啓蒙主義と実証主義の血をひいている。宗教は阿片だという意味を中学生の私なんかに説明して、信心深い母親の顔からかうように見たりしていた。(古在由重・丸山眞男「一哲学徒の苦難の道——昭和思想史への証言」)

丸山は幹治の「リベラル」な立場から多くのものを受け取っているが、セイからは超越的なものに向きあう感性を受け継いだ。

とにかく〔お袋は〕浄土真宗一辺倒です。……お袋は〔熱心な信徒とは〕見えないですけど、非常に信心深い。宗教的敬虔さを持っていた。……〔丸山自身は親鸞の〕『歎異抄』も何も読んでいなくて、ただ祖母が言ったことや、お袋が断片的に言ったことを

通じて、影響と言ったらオーバーだけれど、学問とか知識とかそういうものとはかわりなく、受けていました。道徳と宗教というのは、違うんだな。宗教はこの世の道徳を超越しているんだな、と知らないうちに覚えましたね。（『著作ノート』から長野オリンピックまで）

セイの死に際して、丸山は入営中のために立ち会うことがかなわなかった。敗戦の翌々日に死の知らせを受け取ると、柔道場で転げ回って泣いたという。セイへの敬慕の強さを示すエピソードである。